

---

# STAGE OF OTHERS

さくたん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

STAGE OF OTHERS

### 【Nコード】

N2163M

### 【作者名】

さくたん

### 【あらすじ】

これはSTAGE OFの番外集です。

他の作品とのコラボレーションが多くなりそうです。

(許可はおりているのでお願いします。)

本編とは違い(?)大いにコメディ風にしてあります。

本編もよろしくお願いします。

## エメラルドのメモリー（前書き）

これは本編で掲載したものを  
そっくりそのままもってきました。  
2人の旅行の結末は…？

## エメラルドのメモリー

「グレートバリアリーフよ！わーきれい！」

彼女の強引かつ暴虐無尽なる計画により、

僕らは2人でオーストラリアに来ている。

僕らは世界一美しいであろうさんご礁、

グレートバリアリーフの海上の船に立っている。

「見て奈於ちゃん！このエメラルドに広がる珊瑚。東京湾に浮かぶごみと全然違うわ。」

「ここにきて、東京の悪口はやめてください。」

「あーお魚もいっぱい！全部食べちゃいたいくらいかわいいいいい！」

「ここにきて食い意地をはりますか。」

透はやけにテンション高いな…。

僕との旅行が楽しいのか、もうオーストラリアにいて楽しいのか

よく分からなくなってきた。

でも彼女の楽しそうな姿を見ると、

自然と笑顔になっていた。

そんな自分を、ちょっとバカみたいに思えて、笑ってしまっ。

「わー！近くで見るとまたきれいな〜。」

柵から前に乗り出し、下の方を見ている。

「そんなことしてたら落ちますよー。」

「大丈夫！どうってこと……きゃー！！」

ざぶーん！！

水しぶきが…

「漣！？」

反射的に僕は柵を飛び越し、海にDIVEした！

ざぶーん！！

「漣！？どこだ！？」

「ジュー！ジューよー！」

彼女は…船の上？

つてこととはさっきの水しぶきは…？

近くに三角の、黒いナイフが近づくのが分かった。

……サメだああああ…！！

「うおい！オーストラリアにサメいたんかい！！」

「はやく船に追いつかないと、食べられるぞ〜。」

船のスピードは、並に速い！

「ぬわああああ！待って！待ってったらー！！」

「……………はっ！……！」

かすんだ目には、自分の散らかった部屋が映っていた。

なんとという夢を見たんだ…。

今日は大学入試の合格発表だからだろうか、

変な気分だ…。

机には、散らかった教材と、商店街の福引券が3枚あった。

…帰りにひいてこよう。

「いってきます。」

久しぶりに、あのおまいチーズケーキを買おうと思った。

エメラルドのメモリー（後書き）

夢オチって

好きです

STAGE OF EIVEN ～生徒交換～(前書き)

コラボレーション企画第一弾!

STAGE OF x角でぶつかったのは宇宙人です。

マスクメロンさんありがとうございます!

STAGE OF EIVEN ～生徒交換～

2学期も中盤に入り、木の葉も紅色に色づいてきた。

僕は今日も、漣・晃弘・慎也といういつものメンバーと下校する。

(風) 「そういえば、生徒交換があるんですね。」

(漣) 「そうだった！今年選ばれたんだっけ！」

(風) 「代表になったこと覚えてなかったんだ…。」

(慎) 「今年はこの光鳴湾と…どこだっけ？」

(漣) 「細かいことは気にしない！突っ走ればいいのよ！」

(慎) 「でも今回、かなり異例なる交換だった気がする。」

(水) 「なんか新しい設備のテストの一環での交換だとか。」

(風) 「そうなんだ。ところでいつから？」

(漣) 「明日から一週間ね…。」

・・・

(風) 「家に帰って、準備をしてください!!」

(宇) 「そういえば白美。明日生徒交換だろ？」

(白) 「そう！確か光鳴湾ってところよね。」

(宇) 「聞いたことない学校なんだよな…。」

(白) 「なんか新しい設備のテストなんだって。」

(宇) 「そうなんだ。…どんな設備？」

(白) 「うん…簡単に言えば…タイムマシンかな。」

(宇) 「…へ？」

翌日、目の前にある巨大な機械の前に、僕は立ちすくした。

(風) 「え…なにこれ。」

(翔) 「四次元式生命体転送装置。つまり一種のタイムマシンだ。」

淡々と坂本<sup>さかもと</sup> 翔<sup>しょう</sup>は説明した。

いやいや…22世紀じゃあるまいし。あと百年の話でしょ？

(翔) 「これと同じ設備がある、時・場所を設定すると、

そこに行けるといふシステムだ。」

(漣) 「向こうの学校にも、これと同じ設備があるのね。」

(翔) 「そのとおり。これを利用して生徒交換を行う。」

(風) 「ていうかこんなものが学校にあったんだ…。」

(翔) 「いつ作られたのかわからないのだが…さっき莢香が修理

したんだ。」

ああ、2年生の淡雪<sup>あわゆき</sup> 莢香<sup>さやか</sup>は機械いじりが得意だったっけ。

(翔) 「とりあえず…出発の用意はいいかな？」

(漣) 「うん！風巻くん、企画部の方よろしくね。」

(風) 「はいはい。」

そう言うと、漣は光に包まれて消えていった。

そして、漣のいたところに髪<sup>かみ</sup>の長いポニテの少女が立っていた。

白美を見送ったら、茶髪のポニテの少女が立っていた。

(漣) 「はじめまして、光鳴湾中学校前期生徒会長の樹雨<sup>きぬめ</sup> 漣<sup>みづ</sup>です。」

礼儀正しいな…容姿は髪を長くしたら白美を思わせるな…ん？中学校？

(宇) 「きみ中学3年生？」

(漣) 「はい。あなたも中学3年生ですか？」

(宇) 「いや…高校2年生だよ。」

(漣) 「あれ？ここ高校ですか？」

(宇) 「君こそ高校生じゃないの？」

(漣) 「え？」

…どづいづことだ？

普通は中学校同士が交換するのに、高校生が来るなんて…。

やって来た水野みづの 白美はくびさんも驚いている。

(翔) 「あ……。」

(風) 「ん？どうした？」

(翔) 「いや、そのことなんだけど・・・

…先生も勘違いしていたようだ。」

(風) 「へ？」

(翔) 「こちらは中学生が来ると、あちらは高校生が来ると思っていたようだ。」

決めた。後で職員室を荒らそう。

(白) 「あの…。」

白美さんは話しかけづらい様子でした。

(風) 「あ、ごめんなさい。部室へ向かいます。自己紹介まだでしたね。」

(宇) 「水野<sup>みずの</sup> 宇宙<sup>そら</sup>です。」

(漣) 「よろしくお願いします。」

礼儀正しさが白美のようにキャラじゃなければいいのだが…。

(宇) 「まあとりあえず、クラスへ行こう。」

(漣) 「はい。」

先生からの発表があった後、漣は俺らの友達に声をかけられた。

俺は漣に紹介をした。

(宇) 「このバカは林<sup>はやし</sup> 修斗<sup>しゅうと</sup>だ。」

(林) 「バカじゃない!? なだけだ!」

(宇) 「意味はいつしよだ!」

(南) 「ちなみに俺は南籐<sup>みなとう</sup> 京谷<sup>きやうや</sup>だ。こっちは…」

(齊) 「齊藤 隆史です。」

(宇) 「こいつとはあまりいっしょにいないほうがいいから。」

(齊) 「それはどういう意味かな？」

(宇) 「オケー。その手を離そうか……。こちらは緑 紅葉だ……。」

(緑) 「澪ちゃん、よろしくね。」

(澪) 「よろしくおねがいます。」

つくづく思うが、ポニーテール女子多いな……。

(宇) 「さて……こちらはバカのみ……ぐほお!!」

斉藤……ローキックはいかん……

(清) 「馬鹿の清水 智也です。」

(千) 「私は学級代表の桜井 千里よ！」

うちのクラスの馬鹿どもとも仲良くしていったね。」

千里……他校の生徒にそんなこと言うな。

(澪) 「はい。このクラス馬鹿すぎて困りますが、よろしくお願  
いします。」

……あれ？

満面の笑みで、ものすごいことをやらうと言ったぞ？

あの千里も少し固まっている…

この子…白美より怖い…

STAGE OF EIVEN ～生徒交換～（後書き）

続きます。

僕の小説でこの作品とのコラボを作って！もしくは作りたい！

との申し出があったら、コメントください。

“角でぶつかっただのは宇宙人”は僕のマイページから

閲覧できます！どうか見てください！

## 七夕の願い（前書き）

七夕特別編です。

風巻が高校2年生になった年の七夕。

かつての友と再会する。

## 七夕の願い

7月7日、高校2年生になった僕は、集合場所のファミレスに着いた。

そこには、もう慎也と晃弘がいた。

(慎)「久しぶりだね、奈於くん。」

(風)「慎也！あ、晃弘も！」

(水)「なんか懐かしいな。」

今日、“七夕同好会”ならぬ、1年に1度の再開という企画が実施された。

(風)「あ、菟香はどうしてる？」

(慎)「ああ、俺と同じ高校に入った。いまもよく会っている。」

(水)「今日は来ていないのか？」

(慎)「そろそろ来るはずだけどな……」

と、慎也にメールが入った。

「菟香です」。

バスに乗り間違えてしまいました！んで寝ちゃって…

大変です！今必死で家路にたどり着こうとがんばってます！

これそうにありません。ごめんなさい…」

(水) 「うわぁ・・・お気の毒に。」

(慎) 「よほど慌ててたんだろう。まあ莢香らしいな。」

いや…本当は行きたくないだけだ。

僕しか知らない、あのことがまだ…

(水) 「でも莢香に久しぶりに会いたいな…。」

(風) 「なんだかんだ面白い子だもんな…。」

彼女が今、僕に会ったらどんな顔をするのだろうか…

(慎) 「…行くか。」

(風) 「え？どこに？」

(慎) 「もちろん、莢香の家いだ。」

(水)「今年の七夕は、快晴だね。」

上を見上げると、プラネタリウムなどただのおもちゃと思えてしま  
うほど、

広大で輝く夜空が広がっていた。

七夕の日は、たいがい曇り空で、星などあまり見られないのだ。

住宅に囲まれたこの道を、明るく照らしている。

(慎)「本当は企画部全員で集まるはずだったのにな…。」

澪と翔、彼らはワケがあって会うことができないのだ。

あの事件があって…

(風)「澪は…元気なのかな…?」

と、近くで誰かが歩いてくる音がした。

前方を見てみると…

(風)「菫香？」

彼女は僕を見ると、情けない表情になり、泣きながら僕に向かって走ってきた。

そして、僕の胸に顔をおしあて、

「…風巻…先輩…うっ、うわああ…うわあああああ…！」

泣き叫び、気を失ってしまった。

菫香の家で、彼女を介抱し、2人に菫香の今までの異変について話した。

「（慎）「そうか…少なくとも俺にはそのような一面を見せなかった。」

「（水）「よほどあのことが…ショックだったんだろうな。」

「（菫）「う…う…ん…ここは…？」

菫香が目を覚ました。やはり少し泣いた跡が残っている。

「（風）「久しぶりだね、菫香。」

「（菫）「お…おひさしぶりですう…。」

やはり戸惑っている。いきなり僕の前で泣きじゃくったのだから。

「（慎）「そうだ。今日は七夕だから短冊でも飾ろう。」

「（水）「お！それいいね！」

「（菫）「私もやりたーい！」

急にいつもの菫香に戻った。まあそれが彼女だ。

(風)「よし、みんなで飾ろう。」

“偉大なラノベ作家になれますように”

これは慎也の願いだ。

“彼女いない暦が今年でストップしますように”

晃弘…やっぱり恋愛気にしてんだ…

そして菫香は、

“声優さんになれますように”

いいね。将来の夢ってね。

…なんか僕だけ主旨違う気が。

僕の願いはただ一つだけだ。

それは…

(慎) 「実は…もう一個願いがあるんだ。」

(水) 「奇遇だな。僕もだ。」

(莢) 「あたしも…。」

(風) 「もう一個の…願い？」

そう聞くと、3人は短冊を前にかざした。

(慎) 「企画部全員が幸せでありますように」

(水) 「平穩無事にみんなが過ごせますように」

(莢) 「もう誰も、過ちを犯しませんように」

3つの願いは、彼らの心そのままだった。

言葉に命が吹き込まれている。それは本気でそう願っているからだ。

(風) 「僕の願いは…ただひとつだ。」

僕は、短冊を胸にあて、こつこつぶやいた。

「またあの人に、チーズケーキを買ってあげられますように」

## 七夕の願い（後書き）

果たして菘香の異変とはなんなのでしょうか？  
それについてはいつか本編にて。

STAGE OF EIVEN 〜テスト形式〜(前書き)

STAGE OF EIVEN続編です。

最近アレ読んだので、

アレのアレを使わせてもらいます・・・  
ってマスクメロンさんもう使ってた！

STAGE OF EIVEN ～テスト形式～

(風) 「僕は風巻 奈於です。」

とりあえず白美さんを部室(パソコン室)へ案内し、僕らは自己紹介をしている。

(水) 「俺は水野 晃弘です。」

(慎) 「副部長の海野原 慎也です。」

(風) 「ちなみに晃弘は重度の変態で、慎也は昭和好きですよ。」

(水) 「ちなみに尚人の姉は…」

(風) 「わー！！だべで！」

悪意のこもった顔で、そういうことをさらりと言っな！

ばれたら、殺されるし…

(坂) 「オレは坂本 翔だ。」

(莢) 「あたしは、淡雪 莢香ですう。」

ナルシスト翔と、ロリ受けしそうな莢香だ。

(椛) 「ボクは椛沢椛です。よろしくね。」

「ボク少女」の椛沢さんだ。多分すぐ仲良くなるだろう。

（白）「私は水野<sup>みずの</sup> 白美<sup>はくみ</sup>です。」

私たちと少し文化が違うらしいのですが、なんとかがんばります。

みなさんよろしくお願いします。」

(風) 「え？テスト形式が違う？」

僕は最初に聞いた白美さんからの話に驚いた。

(白) 「はい。あなたたちの旧式では点数と時間に制限がかかっていましたが、

私たちの学校では時間制限だけで、問題数は無制限。

つまり100点満点ではなくなったの。」

そういえば、どこかの学園では試験召喚システムを開発したらしいけど、

それを引用したのか…

(白) 「残念ながら、召喚システムは現在開発中なので、

テスト形式だけ変えたのですが…。」

(水) 「そういえば、明日3年生はテストだ…。」

(白) 「あらかじめ、そのことについては事前に報告しておいたの  
で、

明日は新形式でテストが行われるでしょう。

それに、クラス別で平均の合計点を出し、

一番優秀なクラスには、商品も用意してあります。」

(風) 「9教科も大変だ…。」

(英) 「先輩、がんばってください〜。」

こちらに樹雨 澪ちゃんが来てからの翌日。

テスト形式の違いについて話し、こちらの形式で学校全体でテストを受けた。

でも中3に高校の内容が、分かるのか…？

「テスト返済しまーす。」

(宇) 「先生、返済されても困ります。」

「失礼、テスト返却します。」

(宇) 「前にもこんな間違いがあったでしょう。」

「それでは秋野さんから…」

こいつ、またスルーしやがった。

返ってきたのは、英語のテストだった。

このクラスの平均は112点、なかなか高い。

そんななか俺の点数は…

「97点！？バカだろこれ！？」

うう…勉強してなさすぎた！後悔が…

でも…せめて澁ちゃんよりいいはず…

そんなわけで、いつものメンバーに澁ちゃんを加え、点数の発表をした。

「せーの…ドンー！」

・水野 宇宙 ……97点

・林 修斗 ……93点

・南籐 京谷 ……123点

・ 斉藤 隆史	・ ・ ・ 238点
・ 桜井 千里	・ ・ ・ 214点
・ 清水 智也	・ ・ ・ 13点
・ 緑 紅葉	・ ・ ・ 186点
・ 樹雨 澪	・ ・ ・ 216点

…へ？

(樹)「???どうかしましたか？」

この空気、察してくれ。中3の子が千里に勝つただと…

白美は事前に受けて、203点だったのだが、

これは…

(千)「…なんか悔しい。」

(緑)「澪ちゃん…すごい。」

みんなが驚きの表情で澪ちゃんを見つめている。

(林)「これはクラス点もかなり稼げたな…。」

みんな、ここに超人がいるぞ。

テスト一日目が終わり、みんなが下校したあとに企画部は集まった。

特別に企画部メンバーにはその日のテストが返却された。

ちなみに白美さんと、技術家庭科は莪香も受けた。

今日は、数学・社会・技術家庭科だった。

果たしてどんな点数だったか…

どん!

技術家庭科>

<数学>

<社会>

<

・風巻 尚人  
136点

・  
・  
・

145点

176点

・水野 晃弘  
15点

・  
・  
・

34点

29点

・御神渡 慎也  
198点

・  
・  
・

213点

241点

・坂本 翔  
12点

・  
・  
・

326点

21点

・椛沢 椛  
279点

・  
・  
・

194点

314点

・水野 白美  
214点

・  
・  
・

227点

234点

・沫雪 莢香  
341点

・  
・  
・

(白)「みんな特徴がはっきりしていますね…。」

翔の数学は絶対学年1位だろう。でも他のやばいな…。

慎也は、平均200点、高いな…

僕は平均的で、晃弘のバカっぷりもはっきりしている。

白美さんは、さすが高校生。しっかりと点数を取っている。

でも…

(白)「莢香ちゃん、すごい…。」

(莢)「えへっ、得意なのこれしかないですよ。」

中2で3年生の技術家庭科341点は神だぞ…

でもこのテスト形式はおもしろい。

でも商品ってなんだろう…？

STAGE OF EIVEN ～テスト形式～（後書き）

僕らの学校でも、

このような形式にしてほしいな・・・

A m e m o r y o f a k a n e くはじまりは勅遣い(前書き)

これは風巻 茜の思い出話

A m e m o r y o f a k a n e くはじまりは勸違い

暑い夏の夜の時、多少すずしく感じる風は、わたしの髪をなびかせ  
気持ちをよくしてくれる。

弟の奈於ちゃんはもう帰っていて、晩御飯の準備を進めていた。

「ただいま。」

「おかえり姉さん。」

今日は夏野菜カレー。今はわたしが料理を教えていて、作らせたもの。

「あ、おいしいわ。特にかぼちゃがすごいあってるね。」

「今日は成功だね姉さん。」

「なんだか…思い出すなあ…。」

「ん？なにを？」

「奈於ちゃんの昔のころ。」

すると、奈於ちゃんのはっとした表情を一瞬浮かべたけど、すぐに笑顔を繕った。

「僕はずっと女の子扱いされた記憶が鮮明すぎるよ…。」

「名前も女の子のだしね。あなたは生まれた時から女の子だって言われたのよ。」

「らしいね…。」

15年前、まだわたしが7歳のころのお話だった。

「この子は…女の子…なのかな…。」と医師は言った。

珍しいことなんだろうな、と当時のわたしは思った。

なにせ、いきなり破水したので、近くの病院、つまり産婦人科じゃないところで、

出産したので、男の子か女の子か判別がつきにくいのだ。

実はわたしの母、奈於ちゃんを妊娠しても産婦人科に行かなかった。

理由は、「出産のときのトラウマ」だそうだ。

わたしは帝王切開で生まれたらしく、苦しかったようで、闇を抱えてしまったようなのだ。

そしてこのとおり、ややこしい状態になった。

「はぁ…どうしましょう。パパはどっちだと思う？」

「うむ…」

性別で悩む姿は、こつこつシチュエーションではなかなかないと今頃思う。

けど当時のわたしは

「これ女の子なんじゃない？」

と、てきとーに言ったけど…

「そうじゃない？だって茜に似てるもの。」

「まあ女の子のほづがいいかもな。」

割とうちの親はいいかげんだたみたい。

そのあと赤ん坊は産婦人科にまわされ、性別の確認をしてもらった。のだけど、うちの親は赤ん坊を女の子大前提で、名前を考えていた。

「ああでもないこうでもないわ。」

「どんな名前がいいか…うむむ、」

「ねえねえ、わたし…」

すると当時のわたしは、ある漢字を掌に書いた。

「“奈於”？よくこんな難しい漢字を…。」

「わたしも名前考えたっていいでしょ？」

“奈”は英雄ナポレオンの略称。“於”は『』において

ナポレオンの名において、立派な子になってほしい、という意味だ。

日曜日はずっと考えたのだ。

「すごいわ茜！この名前にしましょう！」

「気に入った。ではさっそく…と医師が来たようだ。」

どうやら結果が出たみたい。そして告げられたのは…

「で、結局男の子だったんだよね？」

「でもお母さんは、『まあいつか』でそのまま戸籍入れたのよ。男の子の場合でも、考えてあったのに。」

「え？それは何？」

「“信玄”」

「…よかった、奈於で。こっちのほうがいいよ。」

「まあわたしも、奈於のほうがいいと思ったから、言わなかったんだけどね。」

「僕のために、いい名前くれてありがとう、姉さん。」

いきなりお礼…：こういつのにちょっと弱いわたしです…。

「ど…：どういたしまして。」

奈於ちゃんにお礼を言われると、少し罪悪感が残る。

でも…：わたしはその罪悪を背負いながらも、奈於ちゃんを守っていき、と改めて決意した。



A m e m o r y o f a k a n e くはじまりは勘違い(後書き)

重要なお知らせ

今後半年間、全ての作品の更新を止めたいと思います。

できたら合間に更新しますが…

わたしは受験生なので、難しいです。

ひまができれば更新します！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2163m/>

---

STAGE OF OTHERS

2010年12月5日21時56分発行